

■ 体験版 ■

知らぬ間にスワップされて新妻を実の兄に寝取られた弟

第一部 スワッピング篇

なつめ  
夏目 棗

□□登場人物□□

- 広一（こういち） 〓 二九歳。夫婦で輸入小物の雑貨商を営んでいる。
- 幸二（こうじ） 〓 二〇歳。学園卒業後小さな貿易関係の会社に勤めていたが、彼女の卒業と同時に籍を入れ兄夫婦の仕事を手伝う事になった。
- 三咲（みさき） 〓 二六歳。ロングヘアの一見お嬢さまっぽい風貌だが、エッチの時は意外と……。広一に一目惚れして駆け落ち同然で押し掛け女房に。
- 操（みさお） 〓 一八歳。ショートカットで巨乳。養護施設で育ったが明るく元気な娘。幸二の二学年下の後輩だった。幸二の新妻。

「おら、幸二……まだ、おネンネは早(はえ)えぜえ！……もつと、飲めやつ！」

酔い潰れて座卓に突っ伏している弟の肩を揺すって広一が空のグラスにビールを注いだ。歳は離れているが顔立ちや体型は良く似た兄弟だった。

「お止しよ、あんたっ！……もうそれくらいにしてやらないと……ほら……こ、今夜は……ね？」

意味ありげに訴える三咲を赤ら顔で見遣った広一が、直ぐに野卑な笑いを貼りつけて新妻を振り返った。

「……おおよ、今夜は『初夜』だったなあっ？」

幸二の隣で心配そうにその背を擦っていた操が、途端に頬を染めて視線を泳がせると、ますますその顔を覗き込むようにして広一が言った。

「——つつうか、『初夜』なんて、とつくに済ませてるよなく、操ちゃんっ？」

「お、お、お義兄(にい)さんっ！」

耳まで真っ赤になって困ったように俯く操に兄嫁が助け舟をだした。

「ば、莫迦だね、あんたっ！……それは、それ……今夜は、今夜……よう……」

何処まで『助け舟』になっただろうか。

兄嫁の言葉も結果として『行為済み』を『既定事実』と言っているようなものだったからだ。それに気づいた三咲が慌てたように付け加えた。

「ほ、ほら……幸二さんの酔いを醒ましておくから……み、操ちゃんはもう一度お風呂で汗でも流してきたらどうかしら？」

「……は、はい……そう……します……」

浴衣の襟元を合わせ直して操が恥ずかしそうに部屋を出ていったのを見送って三咲が小声で広一に訊いた。

「ねえ、あんた……本当にするつもりなの？」

「オメエにそれを言う権利はねーだろがっ！」

妻を振り返ってそう突き放すように答えた広一の眼が暗く淀んでいた。

広一と幸二は近所でも評判の仲の良い兄弟だった。幸二がまだ幼い頃、航空機事故で両親が他界すると、広一は通っていた学園を中退して両親の残した輸入小物の雑貨商を継いだのだった。親戚縁者も殆んど居ない境遇で、生きる為に広一は我武者羅に働いて歳の離れた弟を学園にまで進学させた。幸い、自宅と店舗は亡くなった両親の

生命保険で買い取る事ができたが、身寄りの無い男二人の兄弟が生きてゆくのは容易い事ではなかった。取り敢えず自宅店舗をメインに据えて、近県のデパートなどの出店コーナーは縮小するしかなかった。それでも、店舗の常連さんや近所のおばちゃんたちに助けられて広一は何とか両親の残した商売を続けていったのだった。

そんなある日、広一が二週間程の買い付け旅行から帰ってきた時に連れてきたのが三咲だった。



一目惚れされて駆け落ち同然で連れてきてしまった……と広一は笑いながら三咲を紹介したのだったが、幸二は俄かに信じられなかった。

何処となく「良い処のお嬢さん」という雰囲気ではにかむように幸二に頭を下げた美少女が、無骨でお世辞にもハンサムとは言い難い兄に「一目惚れ」などするだろうか。

実際、幸二は随分後になって、三咲が本当に「良い処のお嬢さん」だった事を知らされた。家出同然で駆け落ちしてきた為、勘当されて疎遠になっているが、何でも北欧のある国の元駐在大使の孫娘だとかいう話だった。真偽の程はともかく、出逢った頃の三咲には確かにそんな雰囲気があった。

その夜、階下の兄夫婦の寝室から微かに洩れ聞こえてくる何か押し殺したような呻き声に、幸二はまんじりともできずに朝を迎えたのだった。

そして、翌日から三咲はまるで以前からしていたような自然さで三人の朝食を作り、午後は店に立った。

「掃き溜めに鶴」などという使い古された言葉を改めて実感するように三咲は冴えなかつた店に華を添えて、彼女目当ての常連客さえ増えていった。

更に、その美貌に加えて彼女のヨーロッパ圏の知識の豊富さと、店舗の輸入小物の雑貨を展示するセンスの良さは新たに女性客も増やしていったのだった。

それからは広一は店舗を彼女に任せてヨーロッパでの買い付けに精をだし、帰って

くれば近県のデパートの出店コーナーを再開する為に奔走するようになった。

傍から見れば美人の嫁さんを貰って張り切っている弟思いの兄……と映っていただろうか。しかし、留守がちで擦れ違いが重なれば、互いにストレスも裡に溜め込んでいった事に自分たちも気づいていなかったのだった。

そんな兄夫婦に守られながらもうじき学園を卒業という頃に幸二が付き合い始めたのが二学年下の後輩の操だった。

やがて、ちよくちよく店に遊びに来るようになって、三咲と操は直ぐに仲良くなっていた。そして、三咲から広一との馴れ初めを聞きだした操は、自分たちの場合も操から告白して付き合い始めたのだと照れ臭そうに告げたのだった。

そんなある日、操から養護施設で育った彼女は学園を卒業すると同時に退所して自活しなければならぬという話を聞いて、三咲がある提案をしたのだった。

つまり、学園卒業後小さな貿易関係の会社に勤めていた幸二に、彼女の卒業と同時に籍を入れて自分たちの店を手伝う事にしたらどうか、と切りだしたのだった。

確かに店舗の常連客も増えていたし、広一が開拓したデパートなどの出店コーナーも実績を上げていて、買い付けや配送、在庫管理など人手が欲しいくらいだった。

広一は一も二もなく賛成し、若い二人も恥ずかしそうに頷いたのだった。

お互い身寄りの無い者同士だし、二階の幸二の部屋に少し手を入れて二人の部屋にして一緒に住む事で異存もなかった。

そこで、兄夫婦を介添えに教会で四人だけのささやかな式をあげた後、新婚旅行代わりに親睦も兼ねてと四人で一泊の小旅行に出掛けてきたのだった。

「ねえったら、止めよう……ねっ？」



小旅行の話に幸せそうに笑っていた操の顔が思い出されて、三咲は継るような声で夫に訴えた。



「だから、オメエにそれを言う権利はねーだろがっ！」

鼻で笑うように同じ言葉を突きつけられて、三咲は返す言葉を失ってしまった。

それは、幸二がまだ学園に進学して間もない頃だった。

最初、幸二はそれを薔薇の花かと思った。何故、居間の絨毯の上に薔薇の花なんか落ちていているのだろう。不思議に思っただけなのに、ピンク色の薔薇の花を拾いあげて、漸く幸二は「それ」が何か気がついたのだった。



ちょうど広一は二週間ほど海外に買い付けに出掛けて留守だった。

土日は幸二も店を手伝っていたが、平日は三咲が一人で店を開けた。午前中に洗濯などの家事を済ませて、開店前にゆっくりとシャワーを浴びるのが三咲の毎日の日課

だった。だから、日常のローテーションどおりに家事をこなした三咲は、その日、創立記念日で幸二が休みなのをすっかり失念していた。三咲は幸二が家に居る土日は昼前にシャワーを浴びる事などしなかったし、逆に平日は立て付けの悪くなった風呂場の戸が半開きになる事にも大して意識がいつていなかった。

ピンク色の小さな布切れを握り締めたまま鼓動の昂ぶりを押さえ切れぬ幸二の耳にシャワーの水音が聞こえていた。



——そんな事をしてはいけない。  
心は繰り返し警告を発していた。

しかし、自分の足が風呂場に向かうのを幸二は止められなかった。

——よせっ！……戻るんだっ！

心の中で叫ぶ声が自分の声でないような違和感があった。

早鐘のように心臓の鼓動が耳の中に反響してその声を遠ざけるような、覆い隠すような感じだったかも知れない。

掌に握り締めた驚くほど小さな布切れから微かな温もりが感じられた。つまり、それは——その温もりを生んだ。理由“が、幸二の鼓動をまた昂ぶらせた。

以前、一度だけ洗濯籠の中に同じような小さな布切れを眼にした事があった。

勿論、幸二は慌てて眼を逸らせて、それ以来、洗濯籠に視線を向ける事を自分に戒めてきた。

幸二の前で兄夫婦も彼を刺激しないように努力していた。三咲も洗濯物の扱いや風呂の時間などに気を遣っていた。

けれど、夏場——。同じ屋根の下に薄着な若い女性が居るだけで、刺激はあちこちに充満していた。

そして夜中、灯りを落とした自分の部屋のベッドの中で“その女(ひと)”を脳裏に思い描く事を拒める程、幸二は聖人君子ではあり得なかった。

立て付けが悪くて半開きになっていた風呂場の戸の向こうに、美しい裸身が湯気を纏って立っていた。

——ガタンっ！



「ひい……っ!?」

お約束な展開に悲鳴をあげかけた三咲の顔が安心したような笑顔に変わった。

「なんだ、幸二くんか……脅かさないでよう……」

風呂場の床にしゃがんで身体を守るように抱き締めた三咲の両腕は、しかし、何も隠せていなかった。いや、多分、覗かれた裸体を隠そうとしたのではなく、泥棒か何か見知らぬ暴漢から身を守ろうとした咄嗟の行為だったのだろう。

量感のある真っ白い双つの膨らみも、ふくよかな下腹部の翳りも、幸二の視線に晒されていた。

そして、ほっ、としたような三咲の視線が幸二の手に握られている見知った小さなピンク色の布切れに注がれた。

「…………おやあ？ ……幸二くん、何を握り締めてるのかな〜っ？」

「……………ふえっ!?! ……やつ…これ、はっ……………あ、ああ、あの……………絨毯の…上に落ちてる……………から……………」

本当の事を言ったのだが、何故、言い訳臭く聞こえるのだろうか。

言った本人がそう感じるのだから、聞いた三咲が同じように感じるのは必然だっただろう……………か。

そして、三咲は幸二の視線が自分の顔に向けられているのではない事に気がついた。「そうだね……………うん、うん♪ ……幸二くんも、男の子…だものね……………」

柔らかく頷いた三咲は両手を広げて幸二を誘(いざな)ったのだった。



「触って……良いのよ……」

勿論、幸二は微かに首を横に振って後退（あとじさ）った。

しかし、三咲の両手が幸二の両手首を掴んで引き寄せていた。

「あうっ!?」

思わず幸二の洩らした声は、感嘆のようにも、羞恥のようにも、聞こえた。

掌に握り締めていた三咲のショーツが膝の上に落ちていた。

「んふっ……ぱんっ、返して貰ったわっ♪」

「だ、だ、だから……それは……」

「……拾って、届けてくれたんでしょ？」

揶揄（からか）うようにそう言われて幸二が少し脹れ顔で視線を逸らす。それを艶かしく見返した三咲は、幸二の両方の手の甲に宛がっていた両掌を揉み込むように蠢かした。幸二の掌の中で量感のある双つの乳房が、ぐにゅ、ぐにゅ、と形を変える。

指先が沈み込むような柔らかさに幸二は頭の中が真っ白になっていった。

幾たびその乳房を揉む事を想像しただろう。

しかし、実物は想像の遙かに斜め上をいつていた。

気がつくくと幸二は脱衣所の床に押し倒されズボンもブリーフも脱がされていた。





——はぶ……う……ちゅぷっ、ちゅぱっ……くりゅっ、くぷっ……ちゅりゅ、ちゅぷっ  
……るろう、くぷっ……にゅちっ、ちゅぶっ……

温かな口腔に包まれた未知の快感に幸二の腰が浮きあがる。

「ね、義姉(ねえ)さんっ!? ……だ、駄目えっ!!」

必死に腰を退いて幸二が義姉(あね)の唇から逃れようと身悶える。

——れろう、るちゅっ……くりゅっ、くぷう……ん、んふっ、ちりゅっ……あふっ、  
んっ……じゅぶっ、じゅぶりゅ……じゅるる、ぢゅぶぶう……

しかし、三咲は更に深く啞え込んだ口腔で舌先を蠢かす。

「ね、義姉(ねえ)さ……ねえさんっ!? ……こ、こんなコト……だめだってえっ!!」

幸二が三咲の頭を掴んで引き離すと、上目遣いで見あげた三咲が少し怒ったように  
言った。

「駄目じゃないのう! ……わたしがしてあげたい……ううん、違っわっ! ……わたし  
が、し・た・い、のう♥」

(そうよ……この、おちんちん……何だか、あの人のに……似てる……)

「ほら、こころ……きもひ、いひれしようっ?」

根元を手指で固定して反り返った裏筋を、れろろろろっ、と舐めあげる。

「わひやあああっ♪」

女の子のような嬌声(こえ)を洩らして仰け反る幸二を可笑(おか)しそうに見あげて三咲はフェラチオを再開した。

(やっぱり、兄弟よね……おんなじトコが良いみたい……って、裏筋は……あはっ……万国共通……かしら?)

——はふっ……ちゅむっ、ちゅるっ……れるう、えろろろ……りゅちっ、るろろ……えるっ、れるるう……

三咲の生まれ育った北欧では性に関して日本よりかなりフランクだった。幸二くらいの年齢になれば男の子も女の子も既に経験済みだった。それは、祖父の代からその地に住み、その地方の文化に囲まれて育った三咲にとっても同様だった。

(幸二くんって……やっぱり、まだ……よね?)

唾液で、にゆる、にゆる、になった幹を輪にした手指で抜きあげながら三咲は尖らせた舌先で雁の括れを責めていた。

(あはっ……食い入るように見詰めてるう♪)

先程までの拒否る言葉や態度も何処へやら、幸二が頬を染めて三咲の口元を見詰めていた。『未経験』の男の子とは≧した≧事がなかった三咲にとって、それは新鮮な

感覚だった。

見遣れば鈴口に、ふくうつ、と先走りが玉になっていた。顔を起こした三咲が舌先で掬いとして呑み込むと幸二がまた身を振って腰を退いた。

「ね、ね、義姉(ねえ)さんっ！……そ、そこ……汚い……」

「ふえ？……そこ……っ？……」

一瞬、何故幸二が厭がるのか判らなかつた三咲は、しかし、直ぐに気がついた。それと同時に悪戯心も芽生えていた。

「そこって……ここ、かな〜っ♪」

またも滲みでてきた先走りごと鈴口を舌先で穿ると幸二の腰が跳ねあがつた。

「わきやあああっ♪」

「ここって、おしっこする処だものね〜っ？」

《逸物》をしゃぶっている時点で汚いも無いと思うのだが、多分それが幸二に羞恥心を刻んでいるのだと気づいて三咲は尚も鈴口を責め立てた。

「…んふっ…(れろう、えるっ)…幸二くんの…(りゆるっ、りゆちっ)…おしっことう…(じゆるっ、ちゅぶっ)…先走りが混じってえ…(じゅっ、ずずう)…おいひい…あふっ…ようっ♪」

「だ、だ、だからっ……ね、義姉(ねえ)さん……止めっ……あうううっ!？」

(あはっ……童貞くんって……可愛い♪)

必死に腰を退いて逃げようとする幸二の下半身に両腕を廻して抱きかかえると三咲はまた《逸物》を呑み込んだ。

——あむっ、じゆるるっ、ちゅぶっ……んふっ、ちゅぶるっ……じゆるっ、じゅぶぶう……ちゅぶっ、じゆるるるっ……んん、んぐっ……んぶう……

口腔に咥え込んだ《逸物》を舌先でなぞりながら三咲は奇妙な感覚を覚えていた。

(あんっ……やっぱり、このおちんちんって、あの人のに似てるう♪)

両目を瞑って舐めしやぶっている、まるで夫の《もの》をしやぶっている錯覚に囚われるのだった。歳は離れているが体型や雰囲気は良く似ていたし、何より、声だけ聞いていると殆んど区別がつかなかった。

「ね、義姉(ねえ)さん……」

(あはっ……)

流石にその単語を言われると現実を引き戻されたが。

(でもう……兄弟だからかなあ……わたし、このおちんちん、好きだなあ……)

夫には言っていない……というより言えないが、三咲が『一目惚れ』したのは広一

ではなく、彼の《持ち物》だった。

向こうでナンパされてOKしたのは広一に惹かれたからではなかった。日本人の旅行者、というのが珍しかったのが最初の理由だった。更に、彼が自分と同じ旅行者として彼女を見ているようでそれが可笑(おか)しかつたのだ。三咲は日本に行った事はなかったし、日本人の男と《した》事はなかった。勿論、彼女の周りに同年代の日本人の男が居なかった訳ではなかった。単に《したい》と思う日本人の男が居なかっただけの事だった。

そして、広一が『日本人の女』だから口説いているような感覚が妙に身体を疼かせたのだった。人種的にも国籍の上でも(国籍は二つあったが)日本人だったが、それまで『日本人の女』として抱かれた感覚が無かった。

だから、人種的に自分と同じ日本人の男と《して》みたかったからだ、と知ったら広一は面白くなかったに違いない。

けれど、ベッドで広一と身体を重ねた瞬間、三咲は何か「運命」のようなものを感じてしまった。

それを正確に表現するのは難しい。一番近い表現は『合一感』だろうか。

確かに……いや、多分(というのも他の日本人を知らないからだ)日本人として

は『立派』な部類に属するのだろうか、サイズやテクニクだったら彼は三咲の知るトツプランクではなかった。

そういう意味ではなく、『肌に合う』とでもいうか、『誂えたようにピッタリ』とでもいえば良いか……まあ、そういう事だった。

それが生物学的な意味で同じ日本人同士だからだったのか、三咲には判らない。こちらに来てからは浮気などしていないからだ。つまり、今の処、夫以外の日本人の男は知らないという意味だ。

「……あう……ね、義姉(ねえ)さん……ぼ、ぼく……」

切なそうな声に我に返った三咲が見あげると幸二の視線が躊躇(ためら)いがちに訴えていた。

「……ちゅぼん……イキそうだったら、いつでも射精(だ)して良いわよっ♪」

一旦吐き戻してからそう言葉を紡いで、また啞えようとすると幸二が首を振った。

「で、でも……く、口に……」

勿論、三咲には幸二の途惑いが本当の意味で理解できてはいなかった。しかし、答えた言葉に躊躇(ためら)いはなかった。

「ええ、お口に射精(だ)してねっ♪」







「ひゃあああんっ♪……………こ、幸二くん……………そ、それは……………だめっ!?」

強引に挿入された三咲は、けれど、その喉から迸らせた否定の言葉に拒む色合いは殆んど感じられなかった。

(あああっ……………こ、困るう!?……………だ、駄目よ、だめっ!?)

勿論、フェラチオだけのつもりだった。挿入(からか)う気持ちも少しあった。しかし、必死に嬌声(こえ)を押し殺しても幸二の挿抜に三咲の身体は正直な反応を返す。

「…んっ……………う…んん、うんっ……………んっ……………」

(やああんっ♪……………あ、あんなに、射精(だ)したのにい!?……………ま、まだ…か、硬くてえ…お、大(おっ)きいい♡)

「あああ、んんっ……………だ、だめっえ!?……………い、いいいつ♪」

夫が留守になつて一〇日程が経っていた。三咲の情動も既に沸点を突破していた。

「義姉(ねえ)さん……………はううっ……………ね、義姉(ねえ)さんっ!」

背後から覆い被さつて、三咲の身体にしがみつくようにして幸二はただただ我武者羅に腰を突きあげる。

「…こ、幸二くんの……………あああ、おちんちん……………ああ、あああっ……………き、気持ち、好むっ♪」

テクニックも何もない単調な抽送でも、若さ故の滾(たぎ)るような突きあげが三咲の最奥を、ごっつん、ごっつんっ、と打ち据える。

「いいいんっ♪……そこおう、奥に、あた…当たってるう!?!……お、おちんちん、もっとう♪……おまんこ……気持ちいい♥」

普段は清楚な兄嫁が卑語を連発して乱れて捲くっていた。

「義姉(ねえ)さん……あううっ♪……義姉(ねえ)さんっ! ……ね、義姉(ねえ)さあ〜んんっ!」

「あああ、いいのう……あああ、おちんちん、いいいん♪」

仰け反るようにして幸二の頭を抱え込んで固定すると、三咲は回転させるように腰を拗(くね)らせ始めた。単調な前後動だけだった幸二の挿抜に三咲の捻りが加わって、膣壁のありとあらゆる粘膜が擦りあげられる。

「ふやああああんっ!?!……こ、これえ、しゅご…凄いい♪……この、おちんちん、いいい!?!……この、おひんひん、しゅき『好き』いい♥」

最早、三咲には夫の《もの》との区別がつかなくなっていた。同じサイズ、同じ硬度で膣奥を満たし、同じ雁の括れが膣壁を抉って、同じ官能の昂ぶりを齎(もたら)していた。

逆に官能に火が点いてしまった三咲は義弟を脱衣所の床に押し倒して騎乗位で跨ると、その喉から獣のような嬌声（こえ）を迸らせて腰を振り立てていった。



「あがあつ、ひぎいいいつ……おちんちん、いいい……あおおうつ……い、いいい……  
いっちやうづうう!? ……あおおうつ、わたしい、いっちやうづううつ♪  
」

小刻みに仰け反って達し続ける三咲の膾壁の襷という襷が幸二の《逸物》を狂おしい程に絞めあげる。

「はううつ!? ……ね、義姉(ねえ)さん ……ぼ、ぼ、ぼく ……も、もおう!!」

頭の中で火花がスパークした幸二は、跨られた義姉(あね)を突き飛ばす事もできずに、その膾内(なか)に盛大に放出してしまったのだった。

「……………も、戻りました……………」

襖の向こうから操のか細い声が聞こえた。

鄙びた安宿の二つ続きで取った部屋は入り口は別々にあつたが、二つの部屋を仕切るのには薄い襖一枚だった。

その声に広一が三咲に目配せをする。

「ほら、幸二くん ……花嫁さんがお待ち兼ねよっ!」

未だ決心がつかないままに三咲が言葉にすると広一が酔い潰れたままの幸二を抱え起こした。

どうするつもりなのか訝しむ三咲に構わず広一は幸二をその部屋に敷かれていた自分の布団に寝かせて言った。

「おら、幸二……とつとと、嫁さんのトコへ戻れやつ！」

そして、部屋の灯りを消して広一はわざとらしく言ったのだった。

「おい、俺らも寝るぞっ！」

三咲が、のろ、のろ、と幸二が寝かされた隣の布団に潜り込むのを見届けて、広一は一旦部屋から出たのだった。

直ぐに隣の部屋の入り口の戸が開く音が聞こえた。

三咲は唇を噛み締めて並べて敷かれていた夫の布団に摺り寄った。そこに寝かされている義弟の顔に耳を寄せると、少し苦しいな寝息が聞こえた。

「……ごめんね……」

隣に聞かれぬように小さく呟いた三咲は義弟の横に潜り込むと、未だ酔いが抜けないうのだろう火照ったその身体を、そつ、と抱き締めたのだった。

隣の部屋の戸に手を掛けて広一は僅かに躊躇（ためら）った。灯りが点いていたら拙いなと思ったのだが、新妻の性格を考えればあり得ない心配だったろう。

案の定、部屋は暗かった。

少しだけ眼が暗闇に慣れるのを待ってから、広一は迷わず人の形に盛りあがって

る方の布団に近寄りその横に身体を潜り込ませたのだった。

直ぐ側で新妻が息を呑むのが聞こえた。

広一はその小さな身体に軽く押し掛かるようにしていきなり唇を奪った。

「んっ!?……………ひぐっ……………んっ、んん……………」

拒む筈はないと思っていたが、新妻は微かに身を振っただけで彼の唇を受け入れた。

「……………んぶっ……(ちゆる、ぺちゅ)……………んっ……(ちゆく、れるう)……………」

更に舌をこじ入れて絡ませると新妻は躊躇(ためら)いがちに彼の舌も受け入れた。

これだけ暗ければバレない自信はあった。体型も似ていたし、声だつて電話口で実際に操が間違えた程だ。しかし、喋り方とか癖は違うし、あまり口を開かぬに越した事はない。

広一は言葉の代わりに唇で操の唇を弄びながら胸に手指を伸ばしていった。

「……………あつ……………んっ……………う……………」

浴衣の上からでもそのボリュームは手にあまった。

下唇を軽く甘噛みしながら浴衣生地越しに左の乳房を揉み込むと、びくんっ、と身を振った新妻の唇から抑えた嬌声(こえ)が零れ、その微かに綻んだ唇から桜色の小さな舌先が、ひろ、ひろ、とまろびでた。

空かさずその舌先を咥えて扱くように吸い立てると溢れた唾液が、じゅぽつ、じゅぽつ、と卑猥な水音に変わる。

薄い浴衣の上から、むにゅ、むにんつ、と揉み込むと妻より幾分量感のある乳房が面白いように形を変える。

「……………やあ…ん……………」

彼の手指から逃れようと身を振る新妻がブラをしていないのが判ったが直に揉みたいのを、ぐつ、と堪えて尚も揉みしだくと、薄手の浴衣生地越しに、つくんつ、と乳首が起きあがるのが指先に感じられた。更に、くにゅ、くにゅ、と突起を転がすと新妻が微かに顔を左右に振って身悶える。多分、洗い立てで糊の利いた固めの浴衣生地が痛痒さを覚えさせている筈だ。

尚も、手指で乳首を責めながら首筋に顔を埋めて舌先を滑らすように舐めあげると新妻の身体がまた、ぴくくんつ、と震えた。そのまま、れろろろうくくつ、と耳の裏側へと舐めあげて耳朵を、はむんつ、と甘噛みすればまたも新妻が身を振る。

次いで彼は上半身を軽く起こすと、新妻の浴衣の襟元を両手で掴んで左右に大きく開(はだ)けさせた。

「あんつ……………やつ……………恥ずか……………しい……………」

視線を泳がせた新妻の双つの大きな膨らみが夜目にも白くまろびでた。その双つの膨らみを下乳から持ちあげるように揉み込んで、乳首と乳首を擦り合わせるようにすると新妻が、いや、いや、でもするように顔を左右に振った。

「あんっ……こ、幸ちゃん……」

弟だと信じ切っている蕩け始めた声に満足気にはくそ笑むと、彼はその豊満な胸に顔を埋めて先程から嬲っていた方の乳首を吸い立てた。

「ひんっ!?……そ、そこ……だ、ダメっっ♪」

敏感になった乳首を、ちゅぱっ、ちゅふう、と吸い立てながらも一方の乳首も指先で摘んで捏ね廻す。

「……んっ……んあっ……う……んっ……」

必死に嬌声（こえ）を押し殺す新妻の官能を呼び覚ますように、双つの乳首を交互に口に含んで吸い立て、歯先で嬲り、両掌で乳房も揉みしだく。

「……いんっ……いあ……あっ……あう……んんっ……」

次第に嬌声（こえ）が上擦り、先程から、もじ、もじ、と内股を擦り合わせているのは判っていた。

（そろそろ、頃合いか……）



焦らす為にわざと触らなかつた下半身に、そろり、と手指を降ろすと、慌てたように新妻の両膝がきつく閉じた。そこを抉じ開けるように彼が片足を押し込むと、思いの他、すんなり、と両膝が緩んだ。

乳首を尚も舌先で弄（いら）いながら掛かっていた夜具を跳ね除け、浴衣の下半身も開（はだ）けさせると、新妻は込みあげた羞恥に顔を両手で覆ってしまった。

曝けだされた太腿から膝下までを、ゆつくり、と撫ぜ降ろし、返す指先を内股に入れ込んで、つつう——つ、となぞりあげると新妻の柔肌が、ぴくつ、ぴくつ、と震えを返す。

そのままショーツの上を、するり、と滑らせて小さなリボンの辺りに指を引つ掛けると一気に膝上まで摺り降ろした。

「ひいっ……!?!」

勿論、彼の顔は未だ彼女の胸に埋もれていたので、曝けだされた下腹部を覗き見られた訳ではなかった。その上、灯りを落とした暗い部屋である。それは判つていても状況以上の羞恥心が込みあげて新妻は両目を瞑つて顔を逸らせた。

彼の掌が、ゆるり、ゆるり、と下腹部を撫ぜ始める。臍の窪みから下草の辺りを舐めるように撫ぜ廻す。時折、更に下方に滑り降りても《肝心なところ》は触れもせず

に内股ばかりを円を描くように這い廻る。

両膝の間に入れられた彼の足のせいで閉じるに閉じられない内股を、刷毛でなぞるように撫ぜ廻されて、新妻の官能にもどかしさだけが募ってゆく。

「……………ね、ねえ……………こ、幸ちゃん……………」

腰を、もぞ、もぞ、と拗(くね)らせて躊躇(ためら)いがちに新妻が訴える。

「おまんこ……………弄って欲しいの？」

弟の口真似をして訊いてみた。

(や、やだ……………な、何だか……………今日の幸ちゃん……………って……………や、やらしい!?)

顔を背けて答えぬ新妻に顔を寄せて覗き込むようにすると、慌てたようにその首に両腕を巻きつけて唇を押しつけてきた。

(……………い、いま……………あたし……………え、エッチな顔……………してる……………)

勿論、彼には新妻の心裡が手に取るように判っていた。それでも彼女の口から求めさせるのが肝要だった。

『オメエからシテくれって言ったんだぜっ!』

その言質(げんち)を取る為に、彼は素知らぬ顔で押しつけられた唇を吸い、また焦らすように内股に円を描く。

一頻り口腔を舐ってから唇を解放すると新妻は、はふう……、と切なげな吐息を洩らした。中々折れぬ新妻に、彼は少し方向転換を図る事にした。

「ほら、俺……僕のも、触って……」

首に巻きつけていた手首を掴まれて下へと降ろされる。勿論、行き先は判っている。「……………ひっ!？」

掌に押しつけられた、熱く、硬く、反り返る《もの》を新妻は、きゆうつ、と握り締めた。

(……………い、いつもより……………お、大(おっ)きいい!?)

彼が焦らし続ける思惑は別の処にあったのだが、新妻は違う理由からだと思ってしまう。だから、言い訳するように早口で言葉にだしていた。

「い、い、今まで……………く、口でしかしてあげなくて、ゴメン…ね…」

(……………んっ? ………………今……………な、なんとっ!?)

つまりそれはまだヴァージンだという意味だろうか。

「……………こ、今夜は……………さ、さ(さ)まで……………い、い(い)よ……………」

(マジかよおっ? ………………待てばカイロの何とやら……………ってか?)

操が幸二に最後の一線を許さなかったのは、義姉の三咲の存在があったからだ。

初めて幸二の家に遊びに行つて三咲に会つた時、ひと目で操は感づいた。

絶対に二人はデキている……と。それは殆んど確信に近かつた。

だから結婚するまでは最後の一線を許さなかつたのだ。身体を許したら間違ひなく比べられるだろう。比べられて自分が勝っている処など思い当たらなかつた。

それでも幸二を繋ぎとめておきたかつた。だから口でして我慢して貰つていた。

「じゃあ、今夜も先に口でしてくれる？」

二人のそれぞれの事情を何処まで理解できたのか、ともかく彼はそう問い掛けた。

「う、うん……」

視線を揺らして、こくん、と頷いた新妻を見て彼は浴衣を脱ぎ捨てると敷布団の上に立ちあがつた。そして、彼に引き摺り起こされてその前に跪かされた新妻は、薄暗がりでもはつきり判る程に反り返つた《逸物》を困つたように見遣つた。

正直な処、操はフェラチオが得意ではなかつた。というより、はつきり言うと嫌ひだつた。それでも幸二を繋ぎとめておく為には致し方のない事だつたのだ。

胸を触らせるのは許した。自分の大きな胸が学校でも男子たちの視線を集めているのは自覚していた。それに、義姉の三咲より「ちよびつと」だけ勝っているかもとの思いもあつた。けれど、胸を触つていた幸二の手指が当然のようにスカートを潜り、

ショーツの中に侵入してくる。直ぐに跳ね除ける訳にもいかず操も幸二の《逸物》を取りだして扱きながら甘えるように言うのだった。

『ね? …ね? ……今日も…く、口でしてあげますから……そ、それ以上は……も、もう少し待って……』

自分の稚拙なフェラチオで幸二が満足してくれているのか操には判らなかった。当然、義姉と比べられている筈だ。それでも、またデートに誘えば断られた事はなかったし、そういう雰囲気になった時も口で済ませれば幸二はそれ以上求めなかった。

「……う……ん……」

根元を握ったまま動かない新妻に焦れたように《逸物》が押しつけられた。鼻先に先走り液の、ぬるっ、とした感触が触れて新妻は、ぶるっ、と身を振った。

——あむっ……う……ちゅぶ、ちゅぼっ……くちゅっ、ちゅぶっ……

仕方なく口に含むと、途端に口腔を満たす生臭い異臭が呼気と共に鼻に抜けて新妻は背筋を慄(おのの)かせた。この臭いが、そもそも嫌いだった。

——はぶう……く……ふっ、ちゅぶ……れろう、えるっ……ちゆる、ちゅぼっ……

望むと望まざるとに関わらず、自分の唇が奏でる卑猥な水音が厭だった。

お座なりな行為は、されている方にも如実に伝わるのは当然だったろう。

(これじゃあ、とてもイケそうもねーなあっ！)

あまりに稚拙なフェラチオに彼は怒りさえ覚えてしまった。



両手で頭を掴んで腰を振り立てると新妻が苦しそうに嘔(えず)いた。

「うぶっ、おぶう!?! ……んぐっ、んぶぶう!?! ……け、けほっ! えほっ! ……う、うええ……」

喉奥を穿つイラマチオに堪え切れずに吐きだしてしまつた新妻を彼が冷めた視線で見降ろしていた。何処ぞでナンパした相手だつたら頬を張っていただろう。

「ご、ごめん、ごめん……気持ち良かったから夢中になつちやつた……」

それでも心を抑えて弟の口真似で囁くと彼は新妻をシートに押し倒した。

「お詫びに、今度は僕が舐めてあげるよ……」

「い、いい……よお……」

慌てて合わせた浴衣の前は、あつさり、とまた開(はだ)けられてしまつた。拒む間もあらばこそ、いつもの幸二とは思えない素早さで、先ほど膝まで摺り降ろされていたショーツから片足を抜かれて大きく両足を開かれていた。その恥辱に満ちた格好に、新妻は頬を染めるしか術はなかつた。

「は、恥ずかしい……」

彼の無骨な掌が股間に宛がわれて、くにゅんつ、と揉み込まれると愛液が溢れるのが判つた。

「もうこんなに濡れてる……」

指先で掬つて擦り合わせると、ぬちや、にちつ、と卑猥な恥音に変わった。

「……………」





このまま逃げだしてしまいたかった。いつもの優しくかった幸二とは別人のような気がした。今日まで待たせた腹癒せなのか、それとも男は閨では変わるものなのか、経験のない操に判ろう筈もなかった。

股間を、くにゅ、くにゅ、と弄っていた彼の指先が、つぶん、と押し入ってきた。

「ああんっ♪」

自分の喉から甘やかな嬌声（こえ）が零れたのを新妻は信じられない面持ちで聞いていた。更に手指で膣口を掻き廻されるだけで腰が浮きあがった。

「ひいんっ……いっ、いんっ……」

（や、やだ……あたし、凄く感じてる？ ……隣に……お、お義兄（にい）さんたちに

……き、聞かれちゃう!）

必死に両手で口を押さえても零れる嬌声（こえ）が止められない。

「……んっ……あうん、あんっ……」

（——んだよお？ ……ホントに処女か、コイツっ?）

膣口の浅い処を捏ね廻しながら、彼のもう一方の指先が下草を探るように掻き分けてゆく。

（……まあ、幸二に抱かれなかっただけ……ってコトかも知んねえなあ……）

「あつ！……ま、待って、幸ちゃん……そ、そこはっ!？」

彼の指先が下草を探っていた理由に気がついた新妻が逃げるように腰を退く。

「いひいつ!?!……そ、そこお、ダメーっ!!」

しかし、押し広げた両足を押し掛かるように固定した彼の指先が、ぶくうっ、と膨らんだクリトリスを摘んでいた。

新妻の腰が、びく、びくんっ、と跳ねあがる。

更に指先で剥かれた敏感な部位を、くに、くにっ、と押し潰されて新妻は堪らず嬌声を迸らせてしまった。

「ひぎいいいいいいっ!!」

隣の部屋の布団の中で三咲は幸二の身体をきつく抱き締めた。流石に、今の操の嬌声(こゑ)はこちらの部屋まで届いていた。

「ごめんね、幸二くん……本当にごめんなさい……」

願わくば二人が既に経験済みであるように、と三咲は祈るような思いで聞き耳を立てた。先程『初夜』を挿揄(からか)われた時の操の表情が浮かんだ。三咲にはどちらとも判断がつかかねた。

気がつくど殆んど無意識でさすっていた幸二の股間が膨らんでいた。



三咲は身体を入れ替えてブリーフを摺り降ろすと義弟の股を押し開いてその間に身体を沈め、《それ》を口に含んで舐め始めた。

「……………あ……………は、ふう……………んっ……………」

軽く達してしまつた新妻の身体から、ゆっくり、と強張りが抜けていった。彼は両の指先で秘唇を左右に寛げると新たに溢れてきたとろみのある愛液を啜りあげた。

「ひんっ!? ……ここ、幸ちゃん……は、恥ずかし……んあう♪」

彼の頭を押し退けようと掴んだ手指に力が入らない。

——じゅずずずう、ぢゅぷつ……あふつ……じゅるるつ、ぢゅずずずう……

尚も吸い立てる卑猥な水音に新妻の腰が羞恥に揺れる。

——ぢゆるう、ぢゅぼつ……はふう……れりゆつ、ぢゅぷう……ぢゆるつ、えりゆ

うつ、れろろう……はぶつ、あむつ……れるつ、えろう、るろろう……

(あつ、やだ、やだっつ! ……お、おべろ……は、挿入(はい)ってきたっつ! ……

こ、幸ちゃんのバカっつ、エッチい、スケベっつ!!)

尖らせた舌先のざらついた感触が膣粘膜のあちこちをこそぐように這い廻る。初めての触覚は、しかし、嫌悪感ではなく快感をその身に齎(もたら)して新妻は途惑いを隠せなかった。

(や、やだ……な、なんでこんなに……あうう……き、気持ち好いのお!?)

舌が抜かれて、ほっ、とする間もなく人差し指を中指に鉤の形に絡ませた二本が捻じ込まれる。

「あくう!?! ……ひんっ、ああつ……んあう♪」

己が喉から上擦った嬌声(こえ)が零れ、自分の膣口が卑猥な水音を奏でる。その羞

恥の思いが官能に置き換わる。

「やんっ……それ、ダメっっ!? ……ああ、ああんっ……やめやめてくえ……こ、嬌声(こえ)でちゃうう!?」

(ど、どうしよう……き、気持ち、いいい♪)

否定の言葉とは裏腹に快感が頭の中を蕩けさせてゆく。

二本指の挿抜を続けながら彼の舌先がクリトリスを騷り始める。

「あん、うあんっ……こ、赤ちゃん……そ、そこ……やめっ、いぎゅう!」

口腔に含まれた敏感な突起を舌先で舐め廻されて腰が揺れる。更に、軽く歯を当てられても甘い痺れとなつて腰が跳ねる。

(あうう……い、いつもの赤ちゃん……ぜ、全然……違うう……やあんっ……き、気持ち、好い……よお♪)

いつもの幸二はこんなに執拗な愛撫をしなかった。いや、そうではなかった。そうなる前に彼の手から逃れていたのだった。

新妻の膣口で、にゅぼっ、きゅぷっ、と水音を立てていた二本指が抜き取られ、逆手にした中指だけが差し込まれてきた。何か探るように膣前庭を弄っていた指先がざらついた粘膜を擦りあげた瞬間、新妻の腰が、びくくんっ、と跳ねあがった。

「ひいひいひいんっつ!!」

未知の快感に途惑う猶予も与えられず、続けざまに快感スポットが指の平で押し込むように擦り立てられる。

「ひんっ!…いんっ、いああっ!?!…ああっ、いああっ…ら、らめっ!?!…いああっ、ああっ…やめ、いあんっ!?!…ああっ、いああっ!?!」

生理的な反射できつく閉じようとする太腿を押し開き、彼の指先が加速する。

「あああっ、いああっ!?!…ああっ、いああっ!?!…ゆ、ゆるひへえっ!?!…お、おかひふう…いあああっ、ああっ…おかひふ、なっはううっ!?!」

涙交じりで許しを請う新妻の腰が、びくんっ、びくんっ、とシートの上でバウンドを繰り返す。擦り立てる指の挿抜に濁りを増した愛液が飛沫となつて迸る。

「いいい、いっくっ!?!…いっくぐううっ!?!…ひゃあう、いあうっ!?!…い、いっく、いいい、いっくぐうううっ!?!」

逆手にあげた両手でシーツを鷲掴み、顔を左右に振り立てて新妻が背筋を仰け反らせて身悶える。その右に左に跳ね踊る腰を押さえ込んで彼の指先が尚も快感スポットを責め立てる。

「やら、やめえっくっ!?!…いぐう、いっくぐう!?!…いっくぐうううっ!?!…いあっ、

いぎゆううつ……いぐつ、いぐつ、いいい、いぎゆううつうつうつ!!」

派手な嬌声を迸らせた新妻は、哀れ、ふしゃあああああつ!!……と潮まで嘔いてしまったのだった。

隣の部屋まで聞こえてきた派手な嬌声(こえ)に、目を覚ましはせぬかと案じるように身体を起こした三咲が義弟の顔を窺った。寝苦しそうに微かに身を振った幸二の両目が、しば、しば、と瞬いた。慌ててその脛を掌で覆って三咲は幸二の身体を優しく抱き締めた。そのまままた眠って欲しいと思った三咲の願いは叶えられなかった。

「み、みさ……ちゃん？」

自分ではない女の名前を呼ぶ義弟の唇に、そつ、と伸びあがつて口付けると、三咲は小声で囁き掛けた。

「大声ださないでね、幸二くん……」

「ふえっ!?!……ね、義姉(ねえ)……んぶう、んむつ……」

あげかけた声を吞み込むように唇を押しつけて、落ち着かせるように啄ばんだ。

「ねっ? ……大きな声をださないのう……幸二くんがここに居るのがバレたら困るのはわたしだけじゃないのよ? ……判るでしようっ?」

「そんな……だって……ええっ？」

「わたしが悪いの……全部、わたしが悪いの……」

見降ろす義姉の瞳を覗き込んでいた幸二の顔に翳りが広がっていった。

「…………だって……そんな……」

理解できたかどうかは問題ではなかった。受け入れて貰うしかなかったのだ。茫然としてゐる幸二に頷いて、三咲はまた彼の下半身に顔を埋めていったのだった。

一方、薄い襖一枚隔てただけの新妻たちの部屋では――。

潮吹きで、ぐっしより、と濡れた掌を拭うように新妻の、ぴく、ぴくくつ、と痙攣している内股に擦りつけた彼が、ぼそつ、と呟いていた。

「――ったく、はしたねえエロまんこだぜ……」

その声に官能に蕩けていた新妻の顔が微かに非難するように強張った。

「……もお、幸ちゃん……ったら………今の言い方……お義兄(にい)さんみたいで

……やらしいっ！」

(――っつと、やぶっ！)

「で、でも、操……みさちゃんのおまんこだって、ほら………とろっとろ、になつて



……イヤらしいよ？」

解剖台の蛙宛らにだらしなく弛緩して開き切っていた股の間を覗き込まれて、慌て膝を合わせた新妻の顔は暗闇でもはつきり判る程に真っ赤に染まった。

「し、知らないい！」

けれど、直ぐにその膝を擦り合わせるようにして腰を、もじ、もじ、と拗(くね)らせた新妻が言外に何かを訴える。

「……………ね、ねえ、幸ちゃん……………」

「なに？」

素知らぬ顔で両膝を押し開いた彼の指先が鵪(しとど)に濡れた膣口辺りをなぞるように撫ぜ廻す。

「……………もう……………お、お願い……………」

視線を泳がせて必死に訴える新妻にとぼけた顔で問い返す。

「だから……………何を、どうして……………欲しいの？」

(うううっ……………今夜の幸ちゃん……………イジワル……………だ……………)

あの『単語』を言わせたいのだとは判っていた。フェラをする時も操は『あれ』とか、『これ』とか、しか言わなかった。

「……………お、おちんちん……………い、挿(い)れ……………てっ」

新妻がやつとの思いで口にだした言葉に漸く満足したのか、彼の手指が新妻の手首を掴んで《逸物》に導いた。

「これかい？」

その熱く滾(たぎ)る《幹》をきつく握り締めた新妻は羞恥に頬を染め身を振りながら言ったのだった。

「……………うん……………これ……………この、おちんちんを……………挿(い)れて？」

(ぬへへえ……………やつと言ったなあ……………後で覚えがねえとは言わせねーぜえ！)

漸く操の口から言質(げんち)を取った広一は満足気に頷くと、彼女の両足を大きく広げて海老反りのように持ちあげた。

所謂「まんぐり返し」に押し広げた秘唇から愛液を掬い取って《逸物》に塗り広げてから、馴染ませるように《膣口》の上を滑らせる。

「あんっ……………こ、幸ちゃん？」

既に解れて食みだしていた小陰唇を熱く硬い《幹》に擦られて新妻が身を振る。それを数回繰り返してから彼は根元を握って先端を《膣口》に宛がった。

「ま、待って!?……………こ、幸ちゃんっ!」

「——んだよお？……今更、待てねーぜ？」

つい、地声をだした彼の変化にも気づかぬ程に、新妻が上擦った声で訴えた。

「ち、違う、ちがうのお……ただ、あたしい……」

「だから、んだよお？」

些か苛立ちを滲ませる彼に気圧されたように視線を泳がせて、新妻がそれでも必死に言葉を搾りだす。

「だ、だから……だからね……あたし……その……は、初めて……だから……あの……や、やさしく……して？」

（まだ、んなコト言つてやがるのかよお？……まあ、ホントに処女かどうかはブツ込んでみりゃあ、判るってかーっ？）

申し訳ありませんが体験版はここまでです。

こちらの体験版にて、作品の雰囲気などをご確認戴けたらと思います。

お気に召しましたら、本篇もどうぞ宜しくお願い致します。